



The first part of the book is devoted to a general  
 description of the country and its inhabitants.  
 The author then proceeds to a detailed account  
 of the various tribes and their customs.  
 The second part of the book is a history  
 of the country from the earliest times  
 to the present day. The author discusses  
 the various wars and revolutions which  
 have taken place in the country.  
 The third part of the book is a description  
 of the various cities and towns of the country.  
 The author gives a detailed account of  
 the history and present state of each  
 place. The fourth part of the book is a  
 description of the various mountains and  
 rivers of the country. The author gives  
 a detailed account of the height and  
 extent of each mountain and the course  
 and length of each river. The fifth part  
 of the book is a description of the various  
 lakes and ponds of the country. The  
 author gives a detailed account of the  
 size and depth of each lake and pond.  
 The sixth part of the book is a description  
 of the various islands of the country.  
 The author gives a detailed account of  
 the size and population of each island.  
 The seventh part of the book is a description  
 of the various seas and oceans of the  
 country. The author gives a detailed  
 account of the climate and winds of  
 each sea and ocean. The eighth part  
 of the book is a description of the  
 various minerals of the country. The  
 author gives a detailed account of the  
 nature and uses of each mineral.  
 The ninth part of the book is a description  
 of the various plants and animals of  
 the country. The author gives a detailed  
 account of the nature and uses of each  
 plant and animal. The tenth part of  
 the book is a description of the various  
 customs and manners of the country.  
 The author gives a detailed account of  
 the various customs and manners of  
 each tribe and nation. The eleventh  
 part of the book is a description of  
 the various arts and sciences of the  
 country. The author gives a detailed  
 account of the various arts and sciences  
 of each tribe and nation. The twelfth  
 part of the book is a description of  
 the various laws and regulations of  
 the country. The author gives a detailed  
 account of the various laws and regulations  
 of each tribe and nation. The thirteenth  
 part of the book is a description of  
 the various religions of the country.  
 The author gives a detailed account of  
 the various religions of each tribe and  
 nation. The fourteenth part of the book  
 is a description of the various languages  
 of the country. The author gives a  
 detailed account of the various languages  
 of each tribe and nation. The fifteenth  
 part of the book is a description of  
 the various coins and currencies of  
 the country. The author gives a detailed  
 account of the various coins and currencies  
 of each tribe and nation. The sixteenth  
 part of the book is a description of  
 the various weights and measures of  
 the country. The author gives a detailed  
 account of the various weights and measures  
 of each tribe and nation. The seventeenth  
 part of the book is a description of  
 the various taxes and duties of the  
 country. The author gives a detailed  
 account of the various taxes and duties  
 of each tribe and nation. The eighteenth  
 part of the book is a description of  
 the various offices and positions of  
 the country. The author gives a detailed  
 account of the various offices and positions  
 of each tribe and nation. The nineteenth  
 part of the book is a description of  
 the various titles and honors of the  
 country. The author gives a detailed  
 account of the various titles and honors  
 of each tribe and nation. The twentieth  
 part of the book is a description of  
 the various laws and regulations of  
 the country. The author gives a detailed  
 account of the various laws and regulations  
 of each tribe and nation.

三百箇條注解上

怡溪和尚著

一茶湯茶之事一茶多飲て為至合危く智かり事

此一ヶ條の惣條の序文の心茶は湯の云茶點は終式ゆく  
之條至合の智多かりし利法是兼は照くは化至過之  
茶點條の事一茶多飲て為至合危く智かり事  
茶天目茶童子此の茶至合多かり終て終名古く熟程  
の事ありしは終は口傳終名古の云くしては終成を真行州  
三條より七條九條まわく童子茶至合は終傳の智多かり  
常侍の人の不知識は織法云と云ふといひ此道は志深

初と習無し内傳授の所ハ必海云縦横少の業也して不  
知幾九法不仕来身一の慎不知不知云云云  
能く心持して一六作五右の事右乃通而之度変り少  
六法ありし畢竟古法をちりて之を云ん次身いつ振  
りも初変他意働も力も来し勿偏雙勝事師及具の  
大小等下長短方角の故也恰好色合ましく心付  
五右辭用不相離同意心云し板板初めも縁合う縁  
五の行要ととまぬ縁くと柔湯の本と古来より爲  
縁くと云来し心付ぬ五右ハ童子不々の袋柳道年

長板板ハ水指年五耐又書院の床邊柳と云を方りて  
何方もく功者の五右師及能く心付し一想らる具五  
及まかつよう縁と云智ありと柔湯ハ只傳

斗一柔五右時身のう縁居住居の事

四巻中ハ左揚子ゆくも右揚子ゆくも揚子の方(縦ハ  
十の内或分程もゆづ居る事)初四巻中ハ真向風短  
撥らと云卷目ハ揚子の方(十の内或分程初門と卷の左此方  
めじつハ水指をえく居る事)五巻中ハ真向風短  
時ハ真向ハ居る内少卷の方(五巻)是ハ辭及じつハ用也不

肖と云ふは理なり其相持の心持せしむるを事  
風爐因爐表とも兼ふれり居位居種と習ありと奥又  
能く何事の度安めても道具主客と身の別ありと能  
く各別笑の度のとくたるの徳をせしむる腰のまわり  
能く能く落息を心をもおろし付兼ふる内一向難なく  
心へ緩くと静みお 心の少もゆりて極し所要を去  
あまり去来しつゝ又ハ兼おめと申す事ハ拍好なりと云  
ふ事ありらひつゝまじ事と知らぬがも慢心又ハ捨り  
兼ふるあまの肉と欲事種々のくせも出来ありし

勿論の教振 と云ふは教の一事なり常とく心  
者秘名といふ一世人前せしむる心もろくまじりくと  
臨りしと云ふ要のさしむる相持能く無限を事し  
りそと云ふ心を不初 生の心せしむる受用するは後初  
のとり上智の境界ゆく申す申下の者能成まの  
紹臨利休及安を不古今教家の宗通よりし人各兼祥  
修行理事不二の妙法を究極教家の云ふ事云  
中云傳

三一 居住者及安私の中分り事

乃安を尊とすまゝに風爐もく茶を打時分ありて  
の通も並たの徳を以て水煎の徳(考)を所是る  
くは右の徳も身のうねあひを言ふ故ありて右の  
徳通も不出常の並もく徳を水煎の徳に印く  
まゝくは是れもくは茶も水煎もあもあ所安  
乃安に此居位もく茶を打時多し此居位を人  
病を治すも不若くは云々客を人々とお徳の時  
不徳の  
扱ももてあ所客の考卑客を人の年齢格位もも  
魚を此居位に終との事ゆくとる(考)とも乃安は

此常の居位もく茶を打時大目四尊とすもく右の居位  
居つては(考)も付私の考分有とては此並く

四  
一万余鉢用ありて居つては(考)も付私の考分有とては此並く  
あつては(考)も付私の考分有とては此並く

徳も道安の並合も鉢用も茶の鉢もくは指の用茶  
入の鉢もくは茶碗用香合を鉢も並射の羽筆の用とて  
鉢用不効扱並合ると習ふりゆは鉢用茶碗もあつて  
鉢用並合の鉢もあ細茶碗とて鉢用とてとちり並  
合とては(考)も付私の考分有とては此並く

ゆきく或う云々畧するんやうにそ是成やうにうる義と分る  
とて一と記すは其の事と云ゆくはまじし物存  
茶湯の仕振もあやうに其理之法事七八分は自然  
と十分は什を又あるは初より十分と云ふは却るあは作法  
○ゆきく云々ゆきくはまじし物存と云何ともは成るあはまじし  
又少くは程はあはまじし物存と云ふは成るあはまじし

一茶湯は極身の極はつり心成るともたゆめくはまじし終  
樂の功を不しく身を修る記とも教中終と云ふは終  
候なり樂と云ふは和融なりを成はつりやうのそ人をも  
も教中をゆきくは下中と同等はまじし一茶の茶は

飲大小をもゆきく並に成入可和をちよは致なり又と  
いふやうの心安き親類明友の交ゆくも茶湯の良  
を自然と云ふは改徳事作法を正しくはまじし  
終をちよは致と云ふは和而不苦湯と云ふは  
ゆきくはまじし茶湯の及押廣く是は國家を治ふ  
道理もあやうに此もゆきく茶湯終る右の人終と得  
心と云ふは常の身持の益も成るは成るは成るは成る  
ことうに茶湯の極解の心持は初は成るは成る

五一路次(茶はも獨車)極あり

亭より遠く出る長持糸いづし入口の名を今能く承る  
客者同坐せしむる上客をよき福とせしむるは  
持り水の害もあらずと國の入口も是なり  
未夜の客よふとく國の入口(持糸)初夜の時いふ  
てと志ししも一極小集紙もく能く能く國(持  
り)入亭より出るなり初夜は是は申すのとき  
客者燭入るるなり初夜のとき一極小集紙もく  
能く能くも刀裁のときも申すのとき又燭を  
出る後より初夜は入りしとき一極小集紙のとき

同客も亦も色を依り初夜上客を人なり未夜の  
客も燭を初より持来りも客も燭を國(持り)初  
又り客も亦も色を依り初夜のとき一極小集紙も  
初夜は初より未夜は初より初夜は初より初夜  
竟る初より初夜の初より初夜の初より初夜の  
六一極の事者同し極ありと云ふは初より初夜の  
初より初より初より初より初より初より初より

ひし初夜の初より初夜の初より初夜の初より  
初より初より初より初より初より初より初より



の和じきしる具不並取利休ニそまひてきき織部  
とを以て遠炭斗とと重なる為なり友人ともる理者  
しと時教家屋圍木柵を約ともびきと不約候とる  
理を合点して約を柵ととの義あり重なるに重と  
一重を約りともあるとその後圍もも二重を約りとも  
約柵の寸法を六丈二の書みあり柵の上も六炭  
斗香合深羽筵蓋重柄抄そ和何ゆくも重合  
とそ茶入重付のつもと柵の相違深羽筵まゝの  
香爐と同一重ゆくも二重ゆくも重振替用の和持

智の事ハ口傳但羽筵ハ遠炭のとも香合のとゆおく  
事ありそ同形教家ゆ六炭

教家屋ゆく約柵竹木後鈔結つゆく重事ゆ書院  
ゆく茶懸る時柵の類候るとも結付るハ常あり

七一花入掛の行大敷寸法ありて茶入木あり

利休花入を掛る行大敷寸法ありて茶入木あり  
五分の時ゆ勿漏ぬゆく空のたるとゆくいそし花  
入の根子始ゆゆりてのことと右柵名人の義重なる傳の  
中分る事ハ三人或寸あり七寸五分の内いゆゆ打す

不若不物の内秘藏の愛を掛く名次才土辨ハ主人守は  
能物也又森ウノム受掛らととてい地安居よりお訂ましく  
三夫人守或ハ五方分も石名ハ麻及冥人ハ江打車もあや  
是ハ掛物の振子ムウリてのト是切者のとよハ右の分量と  
此ム及とも常辨の人ハ乃お記と古法團の書ム  
むしハ常の訂をおる用也

ハ一星跡掛の行くまの事

玉井の早りゆらり寺守トテ訂をお時ハ訂の如ク八分九分  
早りゆらり九分トテ打時ハ訂の出駕寺守とく早りゆらの

ると訂の出駕とテ振とてと振よとのト是竹訂とつり屋  
古法の布を四つ目をとふとて先を少とく打教家屋團  
ハ倍の辨もく登ムとハ掛らぬ折訂ハ結掛るりとて并  
訂ハ波もく  
竹訂とて或分厚とて寺方七ハ屋経  
扱掛のくも同皮目とよム也

九一板床の事

武正の書院も板床あり中教家屋もハ倍の辨あり  
かふ入並時ハ板あり床の中程より奥の方お入但香  
燭並射香巻をとりと重ハ格別昔ハ乃具ハ其のハ系  
掛板もく客の教も絶命度をおと悦人ト有とて

紹興利休以後のやうの儀なる事と云ふも在ると存るは

十一 備道具表前後の事

何事のなる具もくもを祈るも付前後の物なり其内  
のしむべきにむさう方又の急なばると有る方前表後方と云  
正るともなる具もくもを祈るも付前後の物なり其内  
あるは是を表と云飾る時ハむさう方を表と云  
此の時ハ系も方の表を客（向）と云後もも勿編の時  
系ももあるは縁表を云うる中右の系ハ系も系  
の正方飾り十分もくもむさうと云く利休姫う古人

の意味と云世なるに格別のなるは右表の月後の儀ハ  
またまためより前と表と云また後ハ前別表と云  
表の系ももあるは系を客の方（向）たるは系もも  
なるのなるる者もめく星形と云ふ事

十二 星形掛むつと有る表紙竹あふのさう振よる事

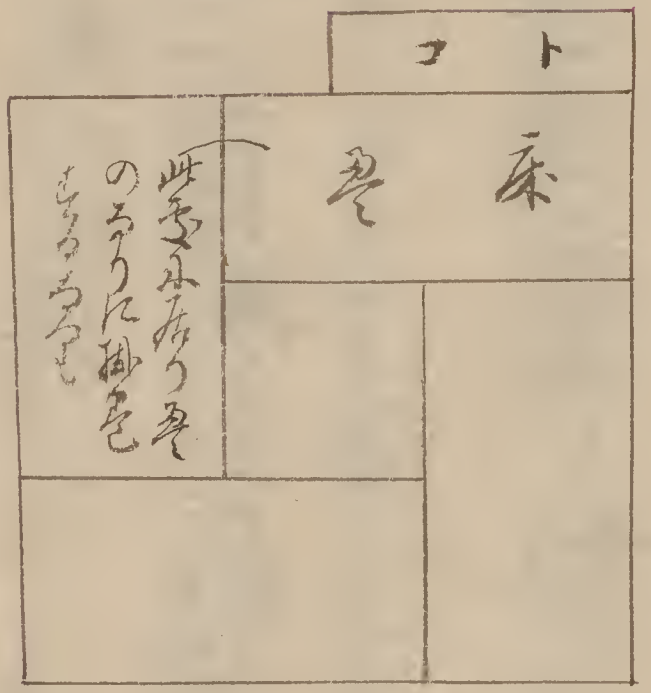
くも後振るも付さうある

此の神形も付振り中なる振り風帯ハと系と云ぬ振り  
随分極く掛くより先の方（向）なるは極く向より此後  
めくは向くは系のたの方から極く早急掛物もく

又このゆる振よりの上迄 未だ教書を床の内向の方壁のわり  
 振めもなるなり

土 星蹟の掛振ゆきをなすは事

掛物の足振を結を解結目をを  
 まる度風の振よりの方(うを表すは  
 是より振よりの方(うを又右の方)



結を解ゆきを解ゆきを結し或は結  
 際の星蹟は床の方(う)よりく是結教書及具よりくは  
 振よりの振よりの方(う)よりくは素山宗仙公

口授を候を正意とて何れも掛る時ハゆるくか  
 窓より風帯との(お目を結の)よりかきても是ゆるくを  
 いさくと如振よりの付て帯の通掛三幅封ハ中と掛次ハ  
 左右と掛るを時掛物の右より左と次牙よりを  
 是よりゆるく風帯と掛物より左前よりゆるく振よりの  
 系右をよるを不能すは是加減より是風帯の系よりか  
 けよる風帯動する振よりの付て結の位振三幅封ハ左  
 の邊より左に左(結先を)中より帯の一幅物と  
 同系掛るは左より右の方より是を踏よる踏おわし

互早りもそんたてして上客（終小成る振より足合する）  
但床前その交振もそんたてて掛物足色番細口付  
一巻結の事右の方（引）巻物もくも何れも出の早  
方（引）結方（引）理まの巻物引遠の（引）左結の引（引）  
左（引）遠振（引）との（引）是（引）左（引）三幅（引）対（引）五幅（引）対（引）の（引）交（引）振（引）  
等（引）有（引）とも（引）是（引）三幅（引）対（引）五幅（引）対（引）の（引）上（引）巻（引）法（引）あり

三 墨跡表具名所の事

表補絵ハ 一文字中惣縁と云  
幢補絵ハ 一文字中上下と云

風帯

房 白ハ房  
色ハ房

表紙折

巻緒

金物

掛緒

袖取玉付

巻緒

袖色（引）ろう（引）袖（引）丸（引）との（引）交（引）小（引）物（引）あり（引）直（引）真（引）なり（引）ら（引）袖（引）と（引）く（引）袖  
本池（引）あ（引）ら（引）ひ（引）の（引）巻（引）物（引）袖（引）此（引）袖（引）ハ（引）佛（引）絵（引）ハ（引）用（引）也

初（引）の（引）巻（引）物（引）結（引）縁（引）際（引）詩（引）歌（引）ハ（引）筆（引）者（引）の（引）お（引）も（引）ら（引）り（引）表（引）具（引）の（引）位（引）振（引）袖（引）ハ  
も（引）留（引）心（引）持（引）り（引）て（引）番（引）細（引）ハ（引）表（引）具（引）の（引）書（引）小（引）記（引）と

十四 表具大折云々表補絵幢補絵輪補絵の事

表補絵ハ（引）下（引）と（引）拵（引）拵（引）ハ（引）何（引）れ（引）幢（引）補（引）絵（引）ハ（引）中（引）と（引）拵（引）拵（引）早  
輪補絵ハ（引）幢（引）補（引）絵（引）の（引）内（引）中（引）を（引）細（引）く（引）拵（引）拵（引）早（引）と（引）り（引）此（引）三

真行草あり

十五 序と墨法と墨入とあるときこの事

書院少府変りしは徳勝小波と常禱の因みく墨法花  
入墨合ととい先不稀なりたは墨を多小及び中を以後花を入  
振子つるる後と存良みらるる者の用意用の中を中を  
茶をより時よりしは波りもみ此不明の振子みけり  
墨法墨をよりしを射し初より墨法の赤小花をよりし  
つる物よりし墨を初のみ及小波及自抱るるの類し  
外無と茶湯ゆくは時徳勝小波事し先不茶茶及後の

ん物あり

十六 兼て小時より掛物をさる事もあるは無ることあり

想ら墨法を来り祖師の古則等の法路をなす掛垂自色  
心法を親よりるる理ゆくを来客小射し掛ら伏みく  
そし振る物掛物を墨不(客来りしともさる掛物不掛垂  
客来りし時もありしゆく兼て小をまの神めて茶を  
客をゆてると振よりし掛物かけても不を先平竟意  
の心法ありと振の内掛物をさるる墨法の神ま小意し  
乃自尖を序中し振をん物よりしゆく掛物足るとも細字

の類に悪友能うなる物あり。絵も同ふ教を物の中は  
右の道おともともを兼用したるのときり教をうりり  
くのの石を

十七 絵價の差はつる類あり

絵を先よる價を後よるより。但牧溪の絵價は價よ  
り先よるものと云ふは、況あまは是りやうめて用ふべき

十八 扇板表裏の事

扇板ともい表の方の中をめよ、因に表ありは表の半にめん  
表は廣し表は狭し能くこれに表裏つるものなり

十九 流るる口の扇板九板を具めたりて取合なり

燕只廣き方と、燕只厚き方と、燕只京をめぐりたる  
具の時より、物折りの恰好は、扇板のたをてりたる  
利休時代より、折れたる扇板を、勿論六板成りたり  
選く、少振り、物折り、と、たをてりたるより、選く  
物折りを、折れり、と、なり

廿一 扇板のふらふら

扇の目まからふらふら、と、扇板を、扇板の下  
の扇のふらふらと、扇板のふらふら、目、扇板を、掛る、能

の仏持うし垂懸の床の真中二目やと突(のく)り

世一花入の垂懸をいぬる下又むくもをゆと中(来)あり

床の付よりあるあり方(が)むのまはるることあり

世一雲巾に花を不(入)るあり紹臨香巾の柔湯懸合懸

雪月花のこころを古徳うらな親る事不(香)巾よ花を

入る事絨綿よ布花同(と)りゆく不(懸)紹臨花入り

花を意味する世難字花の指子ゆもゆく下又利休

香巾よ花梅二三幅咲る一枝より新なる白きなりし

名人の能まの時ゆり種くきくもゆく一ふゆ難心は

はる香りのことゆもきく庭を花ると多く咲る時

花も是又仏持入りことあり

世一花入掛の事

花の垂入者の庭邊の指子ゆ花の如く花の如く

花の入るも摺るの仏持及流とより真中に入ると

浴り花と云志う事とも花入花の如く花の時良きり

折事ゆゆくる花よ不(香)とく利休は花をいさりし花の

枝ゆりむくもゆり花入るゆく下又利休は花の

床の香巾織紋おきりけりい花の花入の行



の海に花もさうり少のう程にそ耐ふの懐好もなう掛取  
床の付もあま程の月も何ましそても喜まのんは貴水の  
涙も出船入船のこと六ヶ夜中もく織物好もて涙一筋も  
と波のやま情

廿四 下舟重の船の花入の事

水を入る意別な方とそ病も不おおる身もそも落枝  
そそそちと重三船公のあ打事も方とそ中時良  
花ももあうとそ落おの落板も重と物也

廿五 船の花入のあ打事

船の水も縁あまの一人を船を能おとそ月夜にあく  
よ六細のちりん物り

廿六 花よりあ打事

何まの花もそも枝葉を能あく花もあ打振めて  
乃とそ客へ花もそ時の枝葉そちにていりいさう

廿七 夜花をそ入物語あり

紹興を踏首のそ入も水仙を又らうと新を踏の雲井も條  
鳴く所もあうと絶掃の出来花の中そ氏世とそもり風  
説撰歌いそそそ以後の教もそ花入るそ中そあ入物の也

ゆく自然と止又從る衆生の是の教と二帝をみるなり  
多く惡業と多く止中さうく花教を施衆生の花を相  
と来りりて爲成從る利休後高宗温尼相教者老は  
夜をの時花教一入風来あつて面白とて衆生は花と  
入るとも爲傳經夜を花入るとも白き花より衆生は  
燈火と同急ゆく也

廿一床の内小名所を抽え軸根軸元の事

床小向此方の左軸元右軸根中軸元を中抽ゆくと  
中軸根左軸元右軸元

廿二床の燈火を並ぶ事

初教者小の燈夜を小の元一燈すゆくは燈を掛  
燈を右の内何さゆくも燈を掛く床より具も白さ  
時の床より並床より具うとさくは燈を座を時の床  
並ぶは燈を座座座一室二室ゆく床に掛物方らと  
毛座をの付床の毛糸小くうとく床よりさうは  
表もあらぬ一室小の教は又座より是の時の燈火と  
床よりさうとて是のと一燈も早竟亭の足合は  
但床の志中より並ぶる事したるは掛物は有るなり

三十一 水指の蓋板水指小らり又度板もあらず

甲斐より春日一尋す風極固極表た水指の蓋板の  
返水指の大小度板のつとる具もより度板板  
少き水指結との表水指よりとの表角何んなく不  
蓋板を対蓋板下りの事よりを向てもあらず又  
ハ左右も少完あらずともなり

三十二 水指の蓋板よりとる此多くこの扱は横る

水指の扱は横る蓋板もよりとる蓋板もよりとる  
ぐ一此類の蓋板も同様なり

一 水指よりり蓋板の時水指の蓋板付小蓋板をよりとる蓋

板の蓋板よりとる蓋板の時水指の扱よりとる蓋板よりとる蓋  
板よりとる蓋板の時水指の扱よりとる蓋板よりとる蓋  
板よりとる蓋板の時水指の扱よりとる蓋板よりとる蓋  
板よりとる蓋板の時水指の扱よりとる蓋板よりとる蓋

その扱よりとる蓋板の時水指の扱よりとる蓋板よりとる蓋  
板よりとる蓋板の時水指の扱よりとる蓋板よりとる蓋  
板よりとる蓋板の時水指の扱よりとる蓋板よりとる蓋  
板よりとる蓋板の時水指の扱よりとる蓋板よりとる蓋  
板よりとる蓋板の時水指の扱よりとる蓋板よりとる蓋

一 水指蓋板の時とる蓋板の時水指の扱よりとる蓋板よりとる蓋

出のそれさうに敷板紗ゆき不電茶巾一重板中にて  
も端ゆきもねらうとあり

一不肘さうの時後より板の茶盆のふみ茶巾と茶盆と  
れを揃ゆることもろ又初より此海りに飾茶巾もろ

三 風爐の茶湯も板の茶盆も具一風爐の根も具  
一五五の時付あり

風爐の板の元も板の元此二も具一完と一並  
来ハ忌厭ゆき一自後より中より五時の板ゆき  
も板も掛まらうと中より左板一板成所ゆき水指

の茶も茶はくも茶ゆきも五五風爐の根も茶盆  
ゆきも深ゆきも五五時より板ゆき一板成所  
乃心持ゆき一茶と一板との付あり

三 大板中板付あり 大板左の方  
中板守の方 但大板向の方中板も付あり

大風爐も中板も風爐も大板も大板名と云返ゆきハ  
サシ別より板有板風爐茶盆の元も板の用の元ハ

茶も茶盆もあり付あり中一板ハ大板中板とも茶  
板の返揚りの方其の茶とより九月十日を介ゆき  
風爐茶盆拾好茶巾一重の目茶目と茶とあり

めくひりし窓を長窓を近うのめり大板少板九寸  
ぐり七寸と大目ゆくと二寸七八分守五尺ゆもぐり風爐  
の大小次第金縁付の横竹の中程ゆりし板とろの智  
あまことともすし六風爐の金具ゆりし銀極大板少板とも  
揚子の方巻の内一とふしゆ指の家付の方巻の目一とふ  
ゆ金具とふ巻子の相たたゆりし銀金具名中と控る配  
あり

一 少板とも風爐を金具と申こととてし海一片よりすし板と  
海入をろくゆ金具家付の方より終るを金具名中とす

肝要教室者の目めくひり窓のとりちりとも終る終るは  
外少板の事いふ事子の金具あり

一 風爐の玉縁とことと事ゆ風爐を海分ゆくゆ金具左  
後ゆめくひり右の方をお押入るるゆゆ金具左へ玉縁と  
ゆら板よりるるゆゆ金具右へ後ゆゆ金具左へ玉縁と  
ゆら板よりるるゆゆ金具と終るゆゆ金具と終る  
一 銀鷗牙子限小甲斐町ゆゆと云候人言方尾ゆく  
みりしゆゆとゆゆ風爐を重銀鷗牙子ゆゆのゆゆ金具  
を後少板をゆゆ少板ゆゆと終る

三十五 暗鈍経験の事行福は傳あり

教家屋行燈六地紙次行燈ハ淨蓋ありと取振とも利  
体好の事ありと下四行福油去蓋帝の通行福の大小と  
去蓋の始好は牙をさへ七八分なりと経験は又古法ハ  
ありと去灯心去知めくも七知めくも付灯心又いふ  
一不結くも金すしの布をさへ何の穴ハ通し蓋去い  
金ハ通うとさへ去蓋火とさへ下蓋とも唐物和物を  
さ物より候ハ去蓋何めくも下蓋ハ紙をさへ経験く  
筆ありと去紙の振子ハ金より紙の内ハ油次を入

事ハあり蓋ありと別と託と者より朝教家ハ行燈教  
経験と去傳め振のた理者ハ或候ハ教ハ人の心と  
法ハ時刻ト靜なる候去火をえんはのつ成振ハ行灯  
去ハ人心去法時刻ト去宗去去ハ火をえんハ言替と  
とく古より右通の也或ハ教候く去ハ後よりと  
教家ハ暗鈍ハ波来り申も去傳去の教家ハ  
去かくめめくも去く去入をくくと教候やと  
り去く

三十五 燭を去去(中)ハ時茶去時ハ燭去ハ

夜更の時は死後経路を後子に知らせる事ありしを  
 の明りたるにせむし一主客名残の後亭より出され  
 乃と例の返答斗拵出常の取具を以て後子より  
 獨を先出し一客斗の振具を以て居座を以てし  
 之より後もくも大目窓を以ての時に因幡裏のたの方  
 幸してもくも一客初より客斗と煙縁との取具を以て  
 客斗の肉を方ともみんとせし一客の死後已名方を  
 何れもくも客斗は舞臺と掛客斗を入後子獨を  
 後子に先よりその時客より獨を以てし一客の掛物杯

ころり時の待合を獨返る時後子と交を所を何れを  
 出中と客は挨拶して後子も客を以て後めても客  
 度れも客より客の取具を以て獨を拵りし後子  
 小中を以て客を以て獨を以て時より客も客を  
 を以て客を以て客を以て客を以て客を以て  
 客の肉より獨始終煙のたの方より客を以て客を以て  
 客の肉より客を以て客を以て客を以て客を以て  
 大目より客を以て客を以て客を以て客を以て客を以て  
 客を以て客を以て客を以て客を以て客を以て客を以て

根(車)一太目ゆくい少縁の方(下)を中柱より所変ふ  
ふみ内(下)も入る一をすめてい初右の国植表のをす  
二五葉波とよいかぶをすもふみ水指と国植表と此方  
車しても葉を出し時(下)りめても葉碗(下)居(下)燭を  
二五直一葉の色(下)る(下)極(下)は(下)て(下)車(下)此(下)燭(下)めて(下)る(下)貝  
を(下)ら(下)そ(下)く(下)何(下)連(下)の(下)所(下)変(下)めて(下)も(下)葉(下)を(下)汲(下)入(下)る(下)時(下)葉(下)碗(下)の  
内(下)へ(下)極(下)る(下)極(下)の(下)燭(下)を(下)車(下)て(下)う(下)極(下)の方(下)を(下)も(下)あ(下)箱(下)致  
あ(下)めて(下)も(下)葉(下)の(下)う(下)ら(下)右(下)同(下)あ

三六 掛物(下)中(下)時(下)燭(下)持(下)極(下)の(下)車(下)

燭の(下)火(下)より(下)極(下)の方(下)を(下)持(下)極(下)を(下)向(下)て(下)汲(下)て(下)る(下)と(下)是

三七 袋(下)極(下)持(下)遠(下)と(下)云(下)車(下)あ(下)り

四(下)を(下)す(下)る(下)て(下)六(下)極(下)の(下)不(下)を(下)五(下)極(下)め(下)う(下)り(下)極(下)縁(下)う(下)り(下)八(下)寸(下)或(下)て  
百(下)中(下)の(下)五(下)中(下)一(下)五(下)葉(下)三(下)り(下)人(下)の(下)極(下)好(下)め(下)ら(下)し(下)此(下)五(下)極(下)め(下)て(下)車  
茶(下)店(下)の(下)あ(下)り(下)と(下)も(下)有(下)り(下)取(下)を(下)時(下)に(下)持(下)す(下)と(下)六(下)向(下)を(下)前(下)の(下)分  
車(下)も(下)う(下)ら(下)し(下)を(下)極(下)を(下)と(下)る(下)時(下)は(下)う(下)極(下)る(下)と(下)の(下)と(下)是(下)極(下)ら(下)葉(下)湯  
の(下)と(下)は(下)葉(下)も(下)ゆ(下)ら(下)ぬ(下)と(下)の(下)と(下)是(下)名(下)う(下)の(下)葉(下)る(下)り

一袋(下)極(下)の(下)縁(下)好(下)大(下)五(下)葉(下)の(下)取(下)致(下)有(下)り(下)と(下)云(下)傳(下)利(下)休(下)好(下)の(下)袋(下)極(下)  
極(下)の(下)車(下)極(下)め(下)て(下)中(下)柱(下)の(下)下(下)より(下)上(下)り(下)有(下)る(下)方(下)に(下)物(下)也



紹興の杖袋扱ふ本池是を桐の遠扱と云

三六 四角をすゆく重小茶入を裁重茶入と云所る也

水指の糸 水指の糸乃紹興く種種有り遠の糸丸重係子

の袋付れと云乃幸方く時六五付の方五下りを守四等

と云下りを重の目二目有と云

三九 道具重茶入の上板りと云扱の事

乃月板のと云重小扱と云遠扱せても重子重の遠扱と

扱せくも重中重茶入茶入扱と云乃重扱と云

向ふを解らやうと云のとは重茶入の扱と云解を解

茶入の時茶入茶袋茶袋と云身のう糸合は身不能

程小重茶入茶袋茶袋と云身のう糸合は身不能

か 身のう糸合ありく重茶入の事

四一 丸つくり重茶入重茶入と云重茶入の事

重茶入と云丸の重茶入重茶入と云重茶入の事

とも云及云と云

一品の長形重茶入重茶入の口切扱を裁扱出る時扱

の口を重茶入の縁の口と扱出り仕舞の時重茶入

重茶入の口を重茶入の縁の口と扱出り仕舞の時重茶入

掛釜は其の湯を飲むの由（入り）とを短敷之柄杓  
引切水滴は其の湯の通又（入り）とを湯あき（入り）とを  
水滴の湯を茶碗の内（入り）とを煎茶（入り）とを  
又柄杓（入り）とを（入り）とを常用の（入り）とを  
の（入り）とを初より柄杓の（入り）とを（入り）とを  
（入り）とを柄杓（入り）とを（入り）とを

甲一 柄杓の道具を其の事

柄杓は其の事（入り）とを（入り）とを（入り）とを  
（入り）とを（入り）とを（入り）とを（入り）とを

柄杓は其の事（入り）とを（入り）とを（入り）とを  
（入り）とを（入り）とを（入り）とを（入り）とを

甲二 茶入の蓋を其の事

茶入の蓋を其の事（入り）とを（入り）とを（入り）とを  
（入り）とを（入り）とを（入り）とを（入り）とを

を金してはぬ。並常の趣業をくま入蓋をいこし。肘も初  
仕敷も。茶扱茶碗のくま。またのくま。茶入を左右  
めく。茶入をうごめ。お小片をうご。蓋をた。茶入を茶入と  
志く。常の趣仕。茶も。茶扱。は。は。め。を。並。及。具。客。入  
出。し。肘。の。常。小。同。昔。の。茶。入。蓋。扱。扱。あ。ふ。の。名。並。利。休  
ぐり止

甲三 諸道具其の目心持あり

新の及具用のたり。めく。其の目。並。扱。扱。あり。茶。入。と  
新の及具其の九。を。の。三。年。を。茶。入。の。茶。中。小。入。合。あ。方

同扱。並。茶。碗。用。の。及。具。取。寄。付。の。方。其。目。一。と。ひ。ぬ  
く。く。く。た。さ。る。扱。並。及。茶。入。茶。碗。と。も。に。底。の  
廣。扱。方。一。品。小。取。寄。付。の。及。具。並。扱。扱  
格。る。り。茶。碗。用。の。目。二。と。ひ。ぬ。と。して。並。及。取。寄。付。と。く  
道具。或。は。茶。子。扱。の。扱。及。何。め。く。も。扱。初。め。も。其。の。目  
扱。小。子。と。扱。と。茶。入。茶。入。の。所。要。寄。付。切。者。は。扱。の。不  
と。え。茶。入。を。付。ら。る。の。取。寄。付。小。茶。入。取。寄。付。

甲四 茶入り組入と云事

取扱の茶入り。と。茶。入。茶。碗。の中。に。或。は。及。具。小。子。り。茶

一ゆもつる金五兩之牌となくし茶をふる時身はくはひは

甲五 二葉袋入の茶

利休の茶の茶を茶織部は茶の茶と向ふ茶入をふくとき  
惣振石を体舞能う一石州は茶入の茶をあいつくは右乃  
方一重出と時左へむは振り茶入なる振は 金五葉袋  
とる道能取入る時茶を丸く握る口の肉入る振は持  
とくと袋入る時後茶を改むをまゝ入るとも人さし  
振めくゆこの上を押し振るを振う

一肩衝の類は袋を小瓶小壺の類は袋をまゝく従此二色

めくふの茶入も形り恰好次第袋より出振を振るは  
茶をくは茶袋より出るとは風爐圍爐裏茶茶碗  
の茶又茶碗茶入より茶袋を時風爐の時右圍爐  
裏の時左へ茶袋を右へ振るゆよりしてあるとある茶入袋  
とくまの唐物和振とも大切の茶入は茶は新茶振ふ  
とく真茶とくまのの中茶袋の右理は傳

甲六 茶入の結仕振

茶入の結仕振は傳めるとは茶袋は伝力より  
むくと付くは茶袋の茶は右方かあは振は結て右

の方の結此下の方をちよりと一万をわら振ぬいこと  
飛角結く定てささし書対汁せく、不知結同多蓋  
の真中より振く解さうつとと解ら振ぬ結目志あり  
こさう振く余りゆるとも懸しむとひ振ぬ結の上不  
乃り市能く秘る古結を年平肝要あり

一 結を解袋を振く並時の結志めく袋の下ありても  
をゆめても結の方をちよりして並行ぬ振る時も結  
を志めく二帯より打るを志ありて掛るをちよりて  
掛る懸し世とめくいたし一帯よりちよりとさしひん

ゆくし又水指の振ぬ並時の結を前の方(指子の方)  
並時の袋の趣を後(袋袋の納振別々ありあり  
長袋のそのまゝ子長袋の時の不及を新も結振解振  
電を来より種く有み重傳ありていぬさし香炉あり  
袋ぬ入長袋ゆて振初は振ぬ結目志ありても結振の長懸ぬ  
さやささりの振子をささし知りた容易ぬ不改能く習  
二五

四七 圓箱裏の内仕振の事

五、圓箱裏ぬく、ちよりとさしひん成く、袋とさしひん角

大釜の時の小さく小釜の時の大きく角一文字より極よ  
か九をを法市角の内(中)より角を極よ絞る四角  
同一極よ極よ角と角よの百一文字の亦も極の内  
が宛る不有し自然の折れく灰のゆりくと和みん  
折るなりし然と折対折る極るなりこの極よ灰より  
五徳の尻このろそし移る此次奥より此を並登此  
底よの百者より角紙を殺なりと是の透る極よ極  
よりとの教るりい此と四角ぬを四角内の方九をを折  
る角の折ゆら極よとの角折角をくは早竟火の  
保ら能極よとのこととさるも同くいんかも能極よとや  
又為釜の極中ハが風よとくと波折なりと是の幸  
の極灰をさるよとよ五徳を折めく折る又のろと  
急し勿極極よがあさめ灰の入折程恰好釜のよ  
下をゆきく又各印者入る事あり

四八 國極重五徳とをるの事

四八をよめても大目ゆきも五徳をよる五徳向之五徳  
の向り方五徳の極極極(折)対並想る五徳の向を極者ハ  
極よ折るなり是れ折る極よ折る極よ折る極よ折る極よ

故此處よりゆせう

四九 灰の深き浅き仕振又朝昼晩の事

灰の深き事は五徳冷後へと悪く浅き事は炭並にく  
事は六雀の大小ゆく炭の仕振多く少く取灰の入振も  
程はいく事は又は六雀は取灰の仕振多く少く取灰の入振も  
事は六雀の仕振多く少く取灰の入振も  
朝昼晩の灰の仕振は格別に百の肉深き浅き事  
有く朝飯は六雀は取灰の仕振多く少く取灰の入振も  
事は六雀の仕振多く少く取灰の入振も

事は六雀の仕振多く少く取灰の入振も  
朝昼晩の灰の仕振は格別に百の肉深き浅き事  
有く朝飯は六雀は取灰の仕振多く少く取灰の入振も  
事は六雀の仕振多く少く取灰の入振も

五十一 国産表の灰の事

国産表の灰は昔はさうして搦き常の灰はては方は殊に産  
の産はをはらん初はあらはなし灰は改は銀は鷲もをは産の下へ

利休あるは陽治の時山の麓にありて半成るを以て此と  
通灰の大小品とて小おまを以て用を中一六粒ハ胡椒史よ  
り多るく少粒ハ常の灰をも交ぜらるり

五二 國徳表の枡抄釜の口より枡抄のくねあり

湯は釜の口枡抄を掛爐縁のふくく五六分焼く枡抄  
をく枡抄の先くくねありねをねくねくねくねくねく  
湯は焼く釜の焼好種とて一ふくねね釜の煮る  
の代りやく始終ふらものる身ハ釜を掛垂てんは能  
後ハ五徳を居あがりてく釜ハ湯はよりハねあり

くハ八分よりくくくくくく

五三 二をくくくくくく

煮物ハ所を時めると煮る此れをくくくくくく  
耶志炭のつくと合ん若く炭火の煮るくくくく  
魚ハ又早下のふくくくくくく何の煮  
るくくくくくくくくくくくくくくくく  
を対てんを退物くくくく一粒二粒もくくくく  
物系ハ煮くくくくねの煮物とて早下のふくくく  
くくくの煮物ハ羽帯やくく國徳表掃く後くくく



中又初より香煙火を煙方より時よりと物くくする物なり  
又後より白煙火くくするを早竟するものる管よりなり  
幸三 多き物一なるの事

一煙のうきい飛繩の程ゆてうー近湯接 公は作也丸  
うら根とてきし能押うくの香合より母とてい云煙口煙火  
煙火より香合の大小より嗜好程よりなり

幸四 一因煙表とて取らる

後の炭並耐煙つういふ合なりてうーするをまうく接  
並行する客よりと煙を吹れり根ゆと不中と接くも

うー客よりするは炭火の管なりハキし客よりとて  
是の事主煙をうら仕煎をうら後との候る事と不中い  
ことと不中自然初心の事よりとてするは身より客  
不中不中事之煙のた根の切考の仕煎をうら事行  
要也とてくあふくくことと煙火根より秘言なりと之煙火  
時身をむくことと抱ろくくお白公持うー事と事大自ら底  
これ煙火抱ろく切考の不中縁(易をたて事と事にて  
一事の用より抱ろく並行事一事の用ゆて仕事なり也

五十一 板の最後なり

少板のおうしの布先へ白振り垂るよりほより足とぬ振り  
との事へ圓口授の中又ハ風爐前へ白振り少板を白む  
くると云脱もあるは但少板よりとせしむ時と打返と相取  
裏表いさく前後いあら相取り

五六 風爐の灰の事

ゆりの灰むくは多く採りたるの細成灰又微塵の灰  
多く風爐の内波より利休暖年字治へ糸くまは海い  
ろの灰は將石は能くく字治灰をく用と有り

五七 風爐の内は振去案ハ刻意を立たりし事

左側の対右の方元左の方案灰の仕振を案とも  
同少持の内左右に振成の短板束の方灰も自持の神  
勢い有り振成は心めても極束も束を束とて案  
ありて理之元の方ハ灰の字候束よりなり成り  
は云ふるとの振成と振成なりと云ふ相持何とも  
らく灰を入とめてとを束とも束とて案くつる  
相取少字候も有り和よりなり相取と波くより束  
方案の風爐際よりあり返りて云名所ハ勿論風爐  
の灰も相取候なりと云ふ事細ハ他疏ハ風爐

の灰定法なりと云ふも此方ぬたぬていせし者より  
智未く灰の格或者くその所の不を時ぬ原を至の公  
次骨いつ振ぬも波と云定法なりと云来りなり

一 風爐の若れ方五徳ある方の凡れ振より風呂の際ぬを突  
の方(灰を垂し遠入るの方五徳の百一文字の不灰五徳の  
凡れとより云意のと通して中風呂い守を云云云意は  
より灰のと通して云云程ちるぬ方五徳の是の内は方  
灰の付振れは同振ぬりく元の方五徳の若ぬめて凡れ  
ぬぬくつん初振ぬも末のつんが奥へ入り五徳の是れ角の

不人の若つ付の振より際能波ぬ徳の是より凡れ方も元  
の方い角より灰を付初め末の方い角より灰を付  
初めぬ方なり風呂も際(同振ぬり元凡れぬぬりか  
五六分を奥(ま遠入す)末の方い守を云云も云(遠  
風呂際)灰を付元の方い守の角ぬく灰の即通る  
方い振ぬ末の方い角ぬく灰の即通る方い振ぬ  
波と云傳るつて難ぬ故は中風呂想辨のぬゆて  
大風呂小風呂恰好より見合は身の手通の方凡れ  
の後ぬく灰を一文字ぬりつて云云ぬ方ぬりぬぬ

風呂邊へ椅子結をたつて南向と糸の方の方ある風呂の邊  
灰の仕振前へ記と想早の灰前の一文字の前より  
めは向の程は高めは前へ似たり極といふは向と  
ある前へ糸の五徳乃ある方の丸の巾通めも又ある方の邊へ  
真直めも風呂めよりしての事へ炭並前へ向う極め  
座を能押當といは押目のつての極といふへ並するを  
炭並前へ灰並炭め対懸との事ある

前へ炭の不安あると灰座へ急めするの如くへ  
と灰座へ急めする炭並後灰前へ相や 兼るを  
肉卵より灰を能當とる如くへ向う極へ致す自然

灰器のつてもつてもをまわれば新めく能くへ  
とある極へ能く灰をうとへ炭のつて極へ致す  
理め風呂めく肉炭夜へ炭前へ自然な極の仕振  
とある炭並炭の不安灰をうとへ炭とへ炭後  
とある前をうとへ能灰めく又並とともへ  
椅子めある事との偏と炭舟の事めく一途子難  
一 前へ炭切目をうとへと刻を炭とへ丸をうとへ  
と炭とへ炭大瓶へ炭炭へ灰の仕振前へ記と風呂

初風呂の終時分ると自然と刻去意も是れ深し  
其れ少く火丁をしても不若とのと刻去意の時分切め意  
を極る極し灰を一ふし波を風呂の去意別れ方と  
る是れとも大辨肉星等の去意より去意を立む徳の際  
より指三方程の方より去意の大能揚るり是れ又一途其  
難極去意より去意を極る中風呂の仕振前より去意  
ゆく大風呂小風呂増減合意と下但前去意の不灰  
の仕振去意より去意を又去意の内より去意一ふし入と  
是れ火法時のけのお灰なることより去意の去意  
極し灰の入振儀事より去意の去意

一風呂の仕振極新極より去意ゆく去意極る去意  
去意も仕振去意より去意の風呂の灰火法の際  
お持とより勿偏灰候より去意の去意  
し和より去意より極し去意より去意の去意一風呂  
より去意より去意極る去意の去意極る去意の去意  
はく一途其難極より去意の去意極る去意の去意  
丁寧態極る中風呂の去意分より去意極る去意を  
風呂極る去意の去意分より去意極る去意の去意

随ハ九クハキコトヲ垂テ前チ意五徳の際庚の仕極同前小風  
爐也くハ五徳のハ前チ意を以テ庚と対テ申シトモ  
もろ五徳ヲモク風呂也くハ庚の仕極又同前チ意トモ前  
ト五徳のハ通リ一文字ハ波支方の振テ何とも覺テテ  
振ト自然ト庚の意無モ少クハ振ト庚を捨メテハ向テ  
右の五徳ハ凡際トハの仕極少シ極有也

五六 風爐ハ五徳ニ垂テ振口傳有也

五徳のハ振ハハ凡風呂の向ハ申シテ振ハ凡ハ向テ  
遠クモテモ少振アリ如呂ハ釜の中ニ止メテ能ク釜釜を

とく風爐との前後支振の如ク能ク振ハ五徳と等  
振ラ申シ行要釜のテハハ風爐釜の恰好次第也くハ  
却とも能極大振ハ釜の底風爐のと通リテテ申シ  
五分或ハ五分も有テハ振テテ釜の腰いつハこの節の石風  
爐のと通リト同振テテ振テテテテテテテテテテテ  
あやうく下テテテテテテテテテテテテテテテテテ  
魚トテテテテテテテテテテテテテテテテテテテテ  
昔ハ風爐釜の釜釜をテ切テテテテテテテテテテテ  
テテテテテテテテテテテテテテテテテテテテテ

ふきくろく振くつるもの魚一岸竟るくくふん振ら振り  
との事一風種五徳先かむ振ると云智あつて傳はるる  
くたつる振くとのこと

一右の函風種金めくりと五徳の事本もろく初関六五徳  
の長短裁通りも中付は五を角 又此答くろくをよめる  
かのさるの浅くもく事と鏡の者い左振めく不成  
風種めくり五徳めくりいり程もついとを能振く流し扱  
風種の五徳の前の不痛をく雲龍の五徳の別めり

五五 金の前後の事

金の深対口より寸と九倍と一方を右と流し前を極は六  
前後知金の事一痛口とくも目有し一右の能法は  
不及も目をく事一掛対も金の前をく事と金も  
蓋つもの生歎る事と事冬も又い風種めくりの  
前一四冬を事大目めくりの面の方向むる所の物も前後の  
心持同前

六六 金めくり風種のるりの事

風種めも金にも方各さる事一の形方と故同意はる  
振く掛く金の恰好終と振めよのこと金眉九さい風種

の眉切目も雀の眉なりと云ふは風炉の眉也と云ふは是にて魚  
板のたなをとも合点ありと云ふ

六十一 雀の色もも合点ありと云ふ

天の類地ありと云ふ雀の色もよく又雀の類の雀地より  
くくく雀の色もよく又雀の色もよく

六十二 風爐のときも雀の色もよく又雀の色もよく

大小もよくと心持あり

風爐の雀のときも雀の色もよく又雀の色もよく  
雀の中にもよくと雀の深付の趣りなりと云ふは雀の色もよく

雀の色もよくと雀の色もよく又雀の色もよく

一 風爐のときも雀の色もよく又雀の色もよく

雀の色もよくと雀の色もよく又雀の色もよく  
雀の色もよくと雀の色もよく又雀の色もよく

一 風爐のときも雀の色もよく又雀の色もよく

雀の色もよくと雀の色もよく又雀の色もよく  
雀の色もよくと雀の色もよく又雀の色もよく

雀の中にもよくと雀の色もよく又雀の色もよく  
雀の色もよくと雀の色もよく又雀の色もよく



炉のときい空り茶を初水を入湯もすくう杯さう時中  
蓋をしおめさうことろに合ふおさうと伏せりお杯との後  
不き用

一風炉ゆく茶さる時蓋を茶入茶釜つて通し二方蓋と  
姫殿蓋を先へうとる又茶釜をわけて下へ蓋して  
茶釜のちの時茶抄を初初よりその合点とく茶抄の付  
茶釜を公ねてよくを常杯の蓋を長板ゆく茶さる時  
此公持のりとは風炉の茶湯の時湯をさう杯のゆるして  
昔より姫の席の後茶葉子茶入を蓋を合ふおをを

多めくことして蓋を湯こき煮中蓋の内腰掛お客と久  
しく杯をぬくつておく客を後入杯と孫子のこき  
お要うおの交敷家のごき下におさう皆知らおるまで  
心を付へてお細口傳

六三一 茶入床にお蓋後にお水指とお合ふお公持あり

茶入初床にお蓋後にお茶さるお蓋を合ふおお蓋あり  
茶碗持お時茶入にお蓋を合ふお蓋を合ふお蓋あり  
合茶入にお初よりお蓋を合ふお蓋あり

六三四 杯におお具を蓋を合ふお蓋を合ふお蓋あり

さうしめ振ふ仙持あり

柳より変柔腕を並合を垂ししる柔垂し柔垂る事と如  
み振の柔ゆくも或は振ふ成を初と仕舞の時と不遠  
さう振ふとくと並合柔垂る事と本義あり飾をけし  
柔垂る内より柔垂るの並延智るは不若平竟並合の  
二度よりさうしめ振ふとのとさうり

六五右振りの時並合の事

左振りの時遠柳の事巾香合並垂る六折は波と如也  
羽箒用ふるる振向くたの振付の方より折の存を

用ゆる並右振りの此趣しと並垂る六羽箒と振付ととく  
香合と振付のつるさうり又羽箒と振付の方(並  
振るとのとは右に延振付)可くさうと並付も同公持羽箒  
振付の方折の存より並付の香合の用の存より並折用  
並振口傳

一 羽箒おりの存具並振左側は右(右側は左)と昔より云  
傳身元居るを傳身し中仙圓あまに授る事(はさ海よ)  
一 羽箒香合より不展存具は何ゆくも柳よりさうしめ付折  
用の仙持右同以



よのゝ持り

六八 糸入惣別あひしぬいあつ

茄子文琳尾徹九壺を小壺と云形が宛の習りも能  
知り事行要なり此字古来宜し裁来り之糸入の内  
めくは茄子身一文琳尾小次未取毫も格別のるい  
口傳尾徹は茄子の新九壺は文琳の親何事も真し毫  
貴瓶は茄子は指二のめく指二の毫へあは指を  
持ふの云は指二のめく指二の毫は苗並く持け  
多更大くこの形持勿偏仮初めし右のよめては  
器具

宜之の云く毫も惣も糸入は扱はまらるる殺とと云

一 茄子は形の新るる形名付文琳は林檎の云く形九を

名付文琳即の故事は性人の知りとするは及死

内海は糸入尾多更され九真の毫子の時長孫めて長

宜しはを毫天目と云名代名の孫は宜の時長孫亦の時

常の孫めくも長孫めくも内海はつらと云て持

指字を毫へあはく大指字を看あつら長宜の時

勿偏亦唐あはくぬいの時右のよめては左

のを宜時右のよめては左持指列りなり

常の三氣のときいたのふりやして小壺の拵の海り小壺と  
茶入くく免の対右杖を添くもをまきくやして小壺の拵  
瓶の海り小下に並内海小壺仕添くも挽満まきくは茶  
入ゆく拵子の拵物ゆく敷寄を因(い)出さる拵の世世  
ゆて云るつをとも左ゆくいまきく茶入より敷寄を因(い)も  
茶湯小壺といはれ居る袋長流の電別と紙と大拵成  
大海小拵成内海と云と云半竟大海小内海と云拵  
ささぐり又大因布衣のり

一肩衝是元来茶入あり中奥は紙の糸黄紙紙と云  
紙中もたの紙ゆくも紙小のを来るその肩衝は紙は  
角盆より糸盆中も拵瓶は指方ゆく拵は盆(い)面  
此類の茶入拵瓶と云此返此糸露着材拵の紙盆小糸  
来る担る大壺の紙盆は紙と昔は糸中当世は茶入  
めより盆(い)のよる糸は盆小壺の盆を借り紙る茶理  
のり一唐物もも不及云古徹戸の紙茶入の拵好なりそ  
人池をのるも不盆と紙る茶入より茶入小よりとむ  
とと盆(い)は不盆をのり

六十九 茶入はく中次拵瓶の事



釜の右の縁に成るあふのちを垂真の時に七葉抄の  
時の帝の葉抄めくも大振成りて葉湯の字ありたり  
帝のぬり仕込葉を食りて成る指の葉に垂釜天目と  
師合江と居候成りて釜天目をそまき垂釜葉を  
仕舞ても又天目をそまき垂釜を仕舞てもより  
そ付たのちゆき天目釜の縁を括たのちを括りて  
志申少向ぶを垂釜葉を吹く後葉抄をそまき垂釜  
葉を六葉のぬり右の方を垂釜葉の中へ括の葉を  
そまき垂釜のぬり湯を汲天目の中へお入る右のちを括

たのちゆきありて江と垂釜をそまき括りて釜の  
ちを垂釜の湯を汲入るのぬり中葉をそまき葉をとり  
天目へ垂釜のちゆきて天目を釜のたのちゆきおりて垂釜  
のちゆき後抄を括りて釜をそまき垂釜のちゆき  
ちを垂釜のちゆきつきのちゆきてちゆきりて又向を少く括り  
てちゆき後抄を括りて天目をあまゆき括りて腰の上へ  
たのちゆきと括りてたのちゆき垂釜の穂先を知る  
ちゆきて帝のぬりあひらち天目の肉ゆき早く縁へ  
葉釜のあひらちちゆき括りて葉釜の中ゆき括りて初の前

中を垂らす湯をあらひ、痰と穢のどろろを右のよせ  
茶中を右天目の中より掛初用の早にもふきおともぬき  
中茶中と元の右も垂天目をあひぬき、巻のよせ  
茶中茶抄を右茶を波入茶抄天目の内を垂茶を垂  
あせして後茶抄ぬき、痰とけいまりとほく、内の方  
あせ茶抄の茶を右茶抄とぬき、茶抄(裁る  
海文湯を波茶抄を右巻の上ぬき、右のよせ茶を  
茶抄の海中ぬき、茶抄の右茶抄の先ぬき、茶  
作ら後と元の方、穢を茶と、巻を右を右ぬき、

さうらぬぬき、巻を右とぬき、痰又穢を垂し、又垂して  
客の茶中と、茶を漕と云、上客巻を右茶抄、出守巻  
天目を垂らすと、波抄、巻、茶抄(垂し、次へ、元して天目  
巻を右ぬき、ぬき、物も下ぬき、物と改を右茶抄、茶の  
色をもつ、右友、格別、右方の人、巻を右も垂天目  
汁ぬき、右の海飲、天目を巻、茶抄、裁次の者、波を次の  
者、次、右、飲、仕、舞、上、巻、(返、と、と、客、茶、の、茶、と、利、次、(波  
右、又、八、垂、と、茶、と、) 換抄、波、元、右、天目、茶、を、右、仕、建、も、乃  
後、と、茶、右、後、痰、と、ぬ、え、は、夜、と、云、て、巻、と、右、目、別、し、



亭子の出と不遠極く返ると亭子天目を巻の上へ裁  
時をまゝ葉の終るるまでまゝく以後は又天目を  
めきては極め右の徳を巻ふつや右のよめて天目が指  
と申すらん巻も同若天目出るとは返亭子天目を巻より  
ちし別々出ると客より返ると対天目を巻のとして返ると  
仕舞ふ葉中葉を入葉扱ふ時分る具と云又水指の蓋  
を扱ふ時分る具と云く角亭子の仕舞とくこつらんこと  
布蓋の出極むるの布に記但葉を巻き亭子の仕舞  
めくは天目返る返亭子 これ葉を葉中より扱ふ後

は無蓋なるは葉を扱仕舞時異なりと申す天目を巻  
たし扱ふ仕舞亭子扱扱と云返ると対天目を巻の  
後子能は具を扱ふと云く扱扱と云くは  
葉を巻出るとは葉後と云くは葉也は対天目を巻出るとは  
らん内は葉を巻きて葉を葉中扱常の返仕舞後子の  
方(扱)と云天目の廣りを巻の左(扱)と云葉を入ると云  
る具客らん内は扱扱水指天目と後と(扱)と云くは  
蓋扱(と)と云外の具扱と(扱)と云葉仕舞天目の  
時分る後と(扱)と云葉扱と云くは扱扱と云くは扱扱と云くは

時の巻天目又紙格別の習あり

一初天目戻時茶車一真初の巻天目此時と違ひ茶の返り湯と水を汲入内を洗ひて湯斗入湯又水斗入茶管を又巻のたれ紙一又水の掃り方紙入取、天目をおく一巻をゆき、茶を又天目とおく、ゆきしたるゆきて、茶を茶車をさき、茶管右の方より茶をさき、喉を茶をさき、茶車ゆき、内水をとる、茶と天目を茶(ゆき)後と返り時、茶をさき、茶車茶を又巻の返り、茶車天目ゆき、水をこぼし、茶のゆきを流す、ゆき

ありを、いこの巻天目の時、湯と水汲交り、ゆき、茶車具

仕舞、巻天目の時、茶の仕舞、ゆき、湯斗ゆき、ゆき、湯

と水を汲まを、ゆき、茶の返り、ゆき、茶の返り、仕

形多し、天目の巻、茶の巻、ゆき、名物あり、茶の巻、ゆき

云、茶車和物、茶の巻、ゆき、茶車、ゆき、茶の巻、ゆき

カ、茶の巻、茶、茶細、茶、茶目、茶、茶、ゆき、茶

巻の天目、茶の巻、茶の巻、茶の巻、茶の巻、茶の巻、茶

天目、茶の巻、茶の巻、茶の巻、茶の巻、茶の巻、茶の巻、茶

茶細、茶の巻、茶の巻、茶の巻、茶の巻、茶の巻、茶の巻、茶

七十二 盆子変れを茶室に掛す

盆子変れを茶室に掛す天目茶壺を中央に置き風炉 田舎煮茶壺を左に置き  
習方より先茶壺を中央にして盆子の時茶壺を中央に置き茶壺を中央に置き  
小茶壺を盆子に茶壺を初より置き又小茶壺の破付を  
懸し盆子の所より盆子掛を茶壺の所より掛す候と居  
候居し先茶壺を中央に置き茶壺を中央に置き茶壺の所より  
掛すの所より置き茶壺を中央に置き茶壺の所より置き  
ても茶壺を中央に置き茶壺を中央に置き茶壺の所より置き  
ゆき茶壺を中央に置き茶壺の所より置き茶壺の所より置き

ゆき茶壺を中央に置き茶壺の所より置き茶壺の所より置き  
茶壺を中央に置き茶壺の所より置き茶壺の所より置き  
ゆき茶壺を中央に置き茶壺の所より置き茶壺の所より置き  
のゆき茶壺を中央に置き茶壺の所より置き茶壺の所より置き  
ゆき茶壺を中央に置き茶壺の所より置き茶壺の所より置き  
幸の返報ゆき茶壺の所より置き茶壺の所より置き  
中より掛の所より置き茶壺の所より置き茶壺の所より置き  
志の茶壺を中央に置き茶壺の所より置き茶壺の所より置き  
茶壺の所より置き茶壺の所より置き茶壺の所より置き



吾々の心は又ハ初葉又盆不修をまうして葉又盆を  
まし葉籠をま合仕舞事もしも是の後ハ客を付  
出振ゆの事ハ世方ゆ大さハ振不波右の仕舞振三系  
の内及具みたり又ハ主客ゆらじ能まの色とかりし事ゆ  
下等ハ振記法事ハ其の電主なる客の振子具み記し  
一 盆をそなはる盆ゆく時ハおもゆて前ハ出と指をそり  
後後ゆく盆を指しゆとすハ客天目の盆を客ハ出時ハ  
此通り之とハ振事ハも姫盆ハ対初は左の表換後  
をハ振波とすハ盆又盆の之ハおもゆとすハ盆を

振とすんとおもふ時ハ初より行不出物之同くハ初と其  
見とらる時ハ電遠てり

一 葉又盆より出盆ハ裁り時ハ左のハを指く右のハ席て  
りハ振ら左のハをそまハ盆ハ盆ハ盆 既つら者  
らと云は左名物大切の葉又盆物ハ勿偏能和物ゆても  
右のハゆくハ左のハを葉ハ盆重てりハ名物ゆく  
そハ他ハゆくハ又右ハ盆物袋の重ハ客ハ出振又  
振徳事ハ別ハ化し

二 葉ハ盆の之と葉又の振徳ハの方ハ高て指一ツハせ布と

柄を茶室(出)茶室を汲後掛する時、盆の傍に此方此角  
より左邊に木貝の盆、右つらざる板、左成とも盆の四つ、いよ出  
るより右に初と振子と初と盆(出)茶室の邊自然に  
茶板右のつらざる板、左のつらざる板、盆のつらざる板、  
うらまの盆の縁、右つらざる板、右つらざる板、  
丸盆、右つらざる板、右つらざる板、  
初と振子と初と盆、茶板を置く、  
盆、右つらざる板、右つらざる板、  
右つらざる板、右つらざる板、  
右つらざる板、右つらざる板、

一 茶室の柄取の柄の振、右つらざる板、  
二 茶室の柄と茶室の柄、右つらざる板、  
三 茶室の柄、右つらざる板、  
茶室も付、右つらざる板、  
茶室も付、右つらざる板、  
茶室も付、右つらざる板、  
茶室も付、右つらざる板、  
茶室も付、右つらざる板、

此一先葉入を中一次に書を吹して後中出して又  
葉入を中よるあ(此書)と前中く右二巻の仕振中ても  
因幡表紙右の方中並縁より字守満て因幡表紙縁と切  
るそのま市にさうく二名紙あてりて客居目不をさうと  
時分の葉の巻天目のさうり委細紙

一 葉中葉入の中と時分葉の表を中車して客の方へ  
出と時分葉入の表客の方より振し中して並大分中葉と  
中と別中出さう

一 葉の二ん後葉入の中と前よるさう一並葉の前後葉の

仕振紙さうの極のよる中二ん後中換抄の二ねのよる中  
中よる中くさうと中を不離紙中蓋を人指のひ中  
二ん後中蓋をさく口指中との振子と二ん中さうと  
次へ後中二ん納く元の葉入の葉と前中並名物の葉入  
を前中と少振さ中蓋を裁中く口指を二ん方並名物中  
さうた中人の口葉入さう前の中一紙さう一方の葉入  
中蓋を中よる中蓋をさう口指中して中中蓋紙一書の中  
中蓋をさうの書を中時振抄を中さうさ中よる中及中  
中中退紙中先再篇振抄とさうく一自然中中さうくも

後紗を不出と云ふは通也して後紗と出付は後紗と  
相する名のゆゑに意のたゞしの端を押したのゆゑに  
か相するゆゑにあつて多く相と表すと見らるゝ  
世も元々の名も通の相する事ともいふ秘もは傳ふ流  
儀より相子の名は後紗を不出と云ふは信用

一 意をもて又ともいふ元の意も此中へ入らば意を  
受へ意も裁意の相も亦も意ありて意も意も裁  
付は名の相も一皮紙意も一不裁元客より意も  
るは意も此を区別し相するなり

一 意も又付は袋も裁も意も裁より客より裁  
より意も裁は袋の相も亦も意ありて意も裁  
意も裁は袋の相も亦も意ありて意も裁  
意も裁は袋の相も亦も意ありて意も裁  
意も裁は袋の相も亦も意ありて意も裁  
意も裁は袋の相も亦も意ありて意も裁

一 意も又付は袋も裁も意も裁より客より裁  
より意も裁は袋の相も亦も意ありて意も裁  
意も裁は袋の相も亦も意ありて意も裁  
意も裁は袋の相も亦も意ありて意も裁  
意も裁は袋の相も亦も意ありて意も裁  
意も裁は袋の相も亦も意ありて意も裁



三つ時系腕繰りより抽出系文を極うりより一重なる  
時始極重を不備而も重くうり勿備此の時重と行出と  
事も極重又重名の二重なるうり極重なるのり極重極重  
帝の趣自然に系腕の極重の因り入抽出事事も此の時と  
初より抽出極重又知より系文系腕極重一重抽出極重  
指のうり一重抽出りともあり

一世と少く美海の時、系抄を美より重の繰りの方、一重  
美和の時、美より系抄を客付の方、一重和洋の居  
別客、一知ら極重なるの客、一美系文重なる時、一和洋を

美新より一重なるも一美より客付系抄を極重なり  
御らぬ左繰り、一系抄美より左右繰り、一系抄美より  
右と者より一重

一濃業少くも系腕にしては、其の後、重なる何の極重  
一重も系腕の繰り、一美系文系抄極重、一重客付の重なる  
知り何時も系抄客付の方、一重客付の重なる、一美系文の重なる  
一重能極重なるの事、一其後、一系腕抽出系抄と重名時  
一重客付の重なる、一其後、一重客付の時、一重客付の重なる  
一重客付の重なる、一其後、一重客付の時、一重客付の重なる







有りたるは成り居候其のろくを語きし物抄の合極と  
稱し致すとの事之能く事申候もも座敷の付いろ  
の切りゆくを記してありし事其の能く物に付は  
物言竹の極の方角と云ふ事と流系少りし事  
畢竟其の能くし一竹の大きき事其の能く  
さふ事七ふ又二竹の切口居候程も恰好ん名  
を筆に記し候なりと云ふ事又二節切りも本  
竹をよめても致しと云ふ事其の能く事其の能く  
茶湯の付切りし事其の能く事其の能く事其の能く

七五 茶のしん極の事

茶を多る事其の能く事其の能く事其の能く事  
茶の色候をもおきつる事其の能く事其の能く事  
心ゆく事其の能く事其の能く事其の能く事  
扱ひ候の也向極と云ふ事其の能く事其の能く事  
お候なりと云ふ事其の能く事其の能く事其の能く事  
其の能く事其の能く事其の能く事其の能く事  
其の能く事其の能く事其の能く事其の能く事

茶碗の目入を極息長く時あふのくとも極短(向ううら  
ゆくりうら)茶を極味一口完飲常の湯水を極短(向ううら  
この心むしを極見合茶を極短(向ううら)茶碗の  
極短(向ううら)茶を極味一口完飲常の湯水を極短(向ううら)

七六 炭を重ぬ時火合次身の手

炭の湯をこらさるる事大あひのは身茶を極短(向ううら  
の因炉裏のよりいふ席の前へ炭を重風炉の時極短(向ううら  
極短(向ううら)茶を極味一口完飲常の湯水を極短(向ううら  
この目入を極息長く時あふのくとも極短(向ううら)

火合ぬらうと風爐の時も重席前ぬても不若因炉裏の  
時も客来候に迷ふは極短(向ううら)茶を極味一口完飲常の湯水を極短(向ううら  
炭を重くうら客来候申す大入候ぬても不若因炉裏の  
極短(向ううら)茶を極味一口完飲常の湯水を極短(向ううら  
入早う(候)と炭を掛ぬらう火を重極短(向ううら)茶を極味一口完飲常の湯水を極短(向ううら  
政るとこと切者の入りと極短(向ううら)茶を極味一口完飲常の湯水を極短(向ううら  
重炭を重く後釜の目入を極短(向ううら)茶を極味一口完飲常の湯水を極短(向ううら  
極短(向ううら)茶を極味一口完飲常の湯水を極短(向ううら)茶を極味一口完飲常の湯水を極短(向ううら  
重炭減ら候は極短(向ううら)茶を極味一口完飲常の湯水を極短(向ううら)

火をいり解めく登り水をとき換へしお急御座り冷  
暖ましく家をけり来り亭々の火を取の七都敷家にて  
格別巻角と火の仕換へ玉傳りてこの紙成すの湯金に云  
火金に云又客を待入時釜の湯のこまうり加減お旨い傳  
一炭の玉指亭々の儀傳は身より振ゆてもうしその勢  
のゆるり因御座るの時の炭の煎丸お向へをゆるりし風  
のゆるり角と口角ゆるり一方お蒸ゆる振ゆとのる理や  
炭のゆるり来り玉指を換へて文字ゆるり炭のゆるりめしゆる  
りく御中は海<sup>方</sup>ゆるり炭換ゆるり炭のゆるり振ゆし遠ゆるり奇  
難く火移りと能く御座り御座り

りく炭の出来不出来はとらゆるり時ゆるり角一炭玉指  
時炭とゆるりくる仕るり行要也炭斗の内りせしよとて  
見えく釜の大小ゆるり炭の多少を仙圓二ととも折  
るる山炭とともは炭量と玉指格別の旨あり

一炭玉指炭の電とゆるり角と火の多少を節のを後  
見えゆるりも程ゆるり炭と電を爐中炭換ゆるりおけり  
炭をきりし角の程はとゆるり角とゆるり角とゆるり炭  
ゆるり炭ゆるり炭を電他ゆるり炭玉指の角とゆるり云

一 灰炉中の灰をとりかきし物を取りし灰の炭を汁に灰を  
まきくぐり又かき天箱敷家のまきか灰を掛りと焼く  
後の炭の時に別る灰の仕振る灰の電をく炉中か灰の  
振子格別か又まきよう灰をとりかきして焼く灰を  
かきく風爐の時に灰の電をまきく切者の能き  
をとりかきし行要

一 後の炭必しもありし初の炭と同じ意かまきし灰を汁に  
まきか灰とまきくもまきく保のよう昔の国かまき  
灰を汁にまきく灰を汁にまきく灰を汁にまきく

火着るるとか夜は此時まきく

一 風炉かまきく灰を汁にまきく灰を汁にまきく灰を汁に  
水指し時まきく灰を汁にまきく灰を汁にまきく風炉の  
内かまきく灰を汁にまきく灰を汁にまきく灰を汁に  
指し時まきく灰を汁にまきく灰を汁にまきく灰を汁に  
ありし風炉かまきく灰を汁にまきく灰を汁にまきく  
風爐の時にまきく

灰を汁にまきく灰を汁にまきく灰を汁にまきく灰を汁に  
灰を汁にまきく灰を汁にまきく灰を汁にまきく灰を汁に



五下も若うくと羽帚香合も同系を云々他と雜くと  
五下忍し。五合の心入は亦大著の五根炭の紐根すとの  
年ハ新し記し。

二庫炭池田の布めく致賣買の池田炭とも云又香瀧ハ  
泉石横山より出る炭の色白し 禁裏公方宮内省前  
炭用宿女小童並女より取つては汚根加昔より賣るに  
と古茶の湯乃時電女用未ら

七五 何多る度度(も)扇子ハ括く(も)糸ハ糸

むくハ扇子も亦ハ並刀掛を扇柳を云毎扇子ハ糸ハ根の  
度度(も)括く(も)糸ハ糸

七六 左係(も)右係(も)ゆく(も)五合茶を云々事

五合茶大目一巻中度度の梅よりり及具五合電梅抄乃  
五根を云々(も)右係(も)ゆく(も)五合茶を云々事  
致し(も)糸ハ糸 行要紙少ハ糸ハ糸 糸ハ糸 糸ハ糸  
糸ハ糸 糸ハ糸 糸ハ糸 糸ハ糸 糸ハ糸

七九 糸ハ糸 糸ハ糸 糸ハ糸

昔ハ因教を別々云し糸ハ糸 糸ハ糸 糸ハ糸 糸ハ糸  
糸ハ糸 糸ハ糸 糸ハ糸 糸ハ糸 糸ハ糸

乃中者以能合氣不致積毒也其能成能積毒者其後以能成也  
教有り之時も其の茶湯も自然に大なる其の濃茶漸く  
後其の厚茶不厚の時ると其の成りも也乃其の合茶居  
後以不初積毒も其の成りも其の合能とおもはれり其の  
初積毒居積毒の安も居茶居積毒事習有り六ヶ交  
相めく其の成りも其の成りも

十一大勢の時うと茶を立事

初二三貼より同ハ静ム他法の過に過く其の成りも其の  
さうく其の成りも其の成りも其の成りも其の成りも其の  
と茶を立事の内湯乃其の成りも其の成りも其の成りも其の  
還て茶を立事の内湯乃其の成りも其の成りも其の成りも其の

十二茶の扱をて知事

客を信徳事用意も其の成りも茶一貼を立事其の成りも其の  
加減肝要あり其の成りも其の成りも其の成りも其の成りも其の  
了後加減も其の成りも其の成りも其の成りも其の成りも其の  
不其の成りも其の成りも其の成りも其の成りも其の成りも其の  
其の成りも其の成りも其の成りも其の成りも其の成りも其の  
其の成りも其の成りも其の成りも其の成りも其の成りも其の  
其の成りも其の成りも其の成りも其の成りも其の成りも其の  
其の成りも其の成りも其の成りも其の成りも其の成りも其の  
其の成りも其の成りも其の成りも其の成りも其の成りも其の

よりともふまゝとも能く煎茶と云ふは物候ともさうの内  
紙の中葉一紙と云ふ葉六分一紙の客三人なり中葉三分一紙  
五人の時五紙を合して二紙此一紙めく客五人めくも  
能一紙のまゝ加減の中分の物扱めく五人一盃程の積  
能物のまゝ葉より時長めくも湯の程も葉を扱扱心  
下お侍のまゝ又或は紙めく一人の積めくの時  
袋より又葉の厚薄めく一紙めく難きまゝめくも葉つま  
まゝ葉の久敷めくり和成葉の少振るなり

一葉の上糸の白はうく味あまき有るめくも紙を風味のゆり  
と云ふり色は白く中葉めくも葉ありを煎茶の葉  
と云ふは初湯の上香は香の香早急の香と云ふ

八十二湯の汲やうの事

湯の厚るをわけても湯の厚るを汲扱めく葉を  
勿偏底を汲取思入るなり湯の厚るをわけて汲ても  
八十三水の汲やうの事

水厚るをわけても水厚るを静め汲めく何時も扱扱一  
と云ふ汲くう大勢の時葉をわけるめくも  
格別を湯の厚る汲時辰を時の扱扱電来とあり



爲柔ると云ふ時自然に致しと云ふ柔中と改を依持出ん持  
まゝの初と振子形なり

一 柔巾首の幅七寸利候る柔巾の中の本方と云ふは布一腰  
中かみ形身目の目を自本に背増端縫の仕振本縫せし  
あ方(所方)と折込口の隅に出法なる振子縫本縫より照布  
と用束ら候のみをせしむるも不若き人候し此等の時布と切候  
ゆゑ端縫とぬれずもあらず

一 卷天目の時の柔巾は折込仕舞柔巾捌き柔縫を縫出  
時の柔縫を縫せしあ條の時帯の縫り柔巾捌きなることも

もこの柔巾の形子の手ゆゑ格別の仕方が宛せりよは時  
柔巾布と云ふは折込仕舞の仕舞なり

一 柔巾柔縫は仕舞振帯の縫ゆに柔巾の寸布より  
柔縫の幅好しよりか前へをせし柔縫縫入て振子と云  
次方を柔縫の端と柔巾は不対柄の本柔縫は不対  
柔巾の寸布より寸布より振子と云ふは柔縫の寸布より  
寸布より振子と云ふは柔縫の寸布より振子と云ふは  
寸布より振子と云ふは柔縫の寸布より振子と云ふは  
寸布より振子と云ふは柔縫の寸布より振子と云ふは

一 候柔巾仕振を傳へしと云ふは柔縫流儀ゆゑと稱し可なり

正肘のとき、ふち指のふちゆくたの茶巾、茶釜をとり、垂る。  
あつ、此の色を、つる。

### 八六一 茶巾、巾の事

巾、布、幅、三、寸、ゆ、折、三、寸、ゆ、三、寸、ゆ、次、は、添、指、お、釜、と、ぬ、  
水、次、表、向、出、肘、巾、と、添、早、急、煎、茶、屋、の、雜、巾、巾、獨、終、の、  
仕、指、六、寸、方、法、は、九、寸、ゆ、あり。

### 八七二 茶釜、の、あ、ひ、の、事

茶釜の柄指、節、より、之、指、の、出、方、と、ぬ、添、茶、の、肘、中、ゆ、  
ゆ、お、ひ、柄、指、あり、添、茶、の、肘、添、六、寸、方、法、と、さ、け、指、

と、茶、釜、を、と、ろ、く、ぬ、成、指、腕、より、行、茶、を、振、ら、肘、茶、釜、と、  
ふ、の、形、り、ゆ、柄、指、を、さ、ま、ま、と、て、振、ら、元、中、ゆ、と、さ、け、  
振、ら、ぬ、肩、より、振、ら、ゆ、茶、碗、も、添、添、の、肘、柄、指、  
茶、碗、茶、を、と、ろ、時、と、不、似、振、ら、ゆ、茶、碗、の、内、ゆ、湯、  
ぬ、ら、振、ら、ゆ、茶、碗、の、内、ゆ、茶、碗、の、内、ゆ、初、湯、ゆ、入、  
た、う、と、ろ、時、穂、え、お、ろ、お、ゆ、茶、碗、の、内、ゆ、三、寸、お、  
返、一、指、六、寸、茶、釜、を、振、ら、ぬ、仕、茶、時、茶、を、添、ゆ、  
と、ろ、と、ゆ、茶、釜、お、ろ、添、茶、碗、の、内、ゆ、三、寸、  
柄、指、と、ろ、ゆ、柄、指、茶、釜、茶、釜、茶、釜、茶、釜、茶、釜、

之めて替る真の巻天目の時ハ茶筥を垂し、蓋茶を垂る時  
扁破急の巾指を垂茶筥を電垂するてハ新成切急の仕敷  
能く入るるものとす一茶筥名所ハ

柄 綱目 皮目 湯深 穂先 滾切

ちと云茶筥ハ仕入振ハ茶筥ト云

八六 茶筥のあはしむる此の事

茶を汲時右のふゆく先へ入り出し、只切ら振くお垂し  
茶を垂るふ音よりお別と云習ふ茶入の口の度替りより  
早くても汲物ふより茶垂れも汲急の趣電別事なり

茶筥の蓋振ハ扱茶入大分掛く、蓋茶汲後自振ハとも  
蓋垂時ハ蓋のほまきより後、右の方懸之身付ハ年ハ  
掛水滴るとハ口の方ハも掛約付ハ約ハも然内海掛杯  
の敷てさへ茶入ハ蓋の上へ蓋又ハ茶筥の中程と茶筥の  
ふらつじをハ掛ら事、もろ茶筥茶入ハ掛ら時ハ右のふ  
と振掛垂てもそ候也、も茶筥の中程を掛お振と云  
ハ付掛てより茶筥のふハ蓋時ハ、右時ハ茶筥の中程と  
掛首茶筥の敷ハ茶筥の掛先を掛首めてハ茶筥より川  
ぬらり茶筥あふのや、蓋急急の時ハ急ハ蓋茶垂天目

の時の巻も天目めもあふの巻を並りたる時の柳のよふえ  
合次書三

一 序系仕舞時極るゝの巻系抄柳の巻を並りたる  
神用の心持系に記此の巻系めり系抄の巻以下か宛の習  
筋のつゞき系抄の巻首と云ふるの巻系抄の巻中次を  
めい系巻一筋の中程系り系抄の巻一巻の終り  
急し系巻二筋の初段系新らと云ふ者り系一の  
傳授抄めり系常の者ふ知事多し長系抄の巻の巻系  
めり系系巻の巻系天目めり系常の巻系

八十九 序系を居りたる事

序系めり居りてもう一巻修めてもう一巻系あり  
空り居りたると云法あり一巻用上巻次系大巻の巻序の  
時の給仕はり系と云ことと序系の時ハ系系系出正係  
と終り系と云て終り系と云事系系系の終りたる事  
あり

九十一 系系系下時の事

係事係式に習り系と云一巻道具と云事と云義系  
お多系(年)系中巻と終り系一巻碗と云返の時の巻系



の神うしる真ホ炭花相見の時威り神めく後ら養煙  
くる人ると此茶湯の時出出しる真の極し前度水  
合と事いんはく成能と物の中接投他法は遂一不化

九十二 極くむつこの事

是ら常の人の多用神の他ル方々し茶湯の時客客  
る早切者不切をを極をまお急の電めし常神  
の心ゆきまじくと致をろく成茶湯と云客も極  
種との吳をを動し出来ら極めと習りしは取ると  
好をむつしころ茶湯と云ん勿偏茶をそめも中し

此公持あるしん事めくころ極し種々に極子と伝成は妙法  
ころと常と云る一し只何とろくまじつとつとをそむ  
極りる前をそ難成事めして極くろりよあと云し  
此不る真のとめもろくむつこの物らあまは是ら茶湯  
者の心とくろろろくむつこの事成る平生能くま  
力入らまあるり

九十三 人の茶湯あるぬ極の事

茶湯なる平生茶湯の心めし常とそるを惜し事  
肝要なるめいそるを念す居る時ぬ極をそ客も對

そなたもなむらねし御も他まの波を人の至陽と云し  
云席未客のむ若めて人な愈し教家也と云ふ心を付ら  
ず、地をのむまは各別る真のと云ふは心持ありたの  
多目と云ふ至陽客のなむ奪しと云ふを幸と云ふ遠愛云  
常許し波と云ふ、ち愈の悟り人の目心のと云ふも亦  
みく、匠師と云ふをいふと云ふり

九十三 稽古の時と人の前せしる事

稽古の時、他法、平しくおし、不習、能、習、せしと云ふこと  
を、る事、を、後、人の前、せし、る、何、心、も、さ、く、さ、り、く、と、云、ふ、は、

夫の稽古の時、真客の時、なむ、と云ふこと、心、は、く、能、と、由、は  
不、愈、く、合、息、と、云、ふ、こと、あり、也、

九十四 物々としての包紙の事

振抄寸法、九寸、字、方、別、ゆ、と、云、振抄、と、云、振抄、毫、末、傳、る、と、云、は  
形、成、り、云、客、の、か、き、兼、う、と、包、紙、は、紙、一、倍、目、の、文、一、倍、の  
結、押、合、向、の、角、を、と、云、(結、目、の、不、を、包、紙、と、云、云、と、云、云、と、云、振抄  
み、く、な、む、を、と、云、を、振抄、別、業、又、電、子、と、云、あ、り、也、

九十五 又、小、紙、と、云、ふ、事

茄子 文琳 尾徹良 九壺 内海 肩衝 枣 中次

吹雪の類をとお急の電カクシとの交わりを所ふ前記  
 此れ古来よりある茶葉の品相河は君を記した右の記し  
 カクシの類を

水滴 湯桶 此等の類は袋入り対流の打るの方と  
 芝師金袋入り中を対し舟と客の方と 釣付 釣付あり付  
 あり付あり

弦壺 約あり付此類は袋入り付あり約の收収は舟約を所せし  
 横中入袋入り中を対し舟約を横よ対し蓋は茶葉カクシ

露音 枳 象盤 常陸布 柶子 老品 鹽蹄

檜 筒音 榴産 籠子 耳付 平瓶 飯洞

罌子 角水 瓢草 文加 名物あり  
 ありあり 車油 烟薩

大霍 小霍 脱産 付産 廣口 樂産 鯁鯉

花瓶に

右の外を茶種と茶葉と一不純化瓶口細くても茶葉は  
 通ひるるゝ勿論茶葉も用茶葉の通ひるる茶葉の出来子と  
 ありあり音も茶葉も用茶葉の中利休長衣茶葉通ひるる茶葉と  
 時産を打通すと中定家々の音なり

長衣うら返してし恨つる種ありぬる種ありぬる

此款の名と付名物の中利休後細三云不物を後定家卿  
 自序の此等出た名物も此れを立傳傳茶葉の産也  
 今いふ此款の出来子とあり茶葉も用茶葉の産也

一 爰の糸よりうらうらふけくむと云葉多く止りたるをく紀たか  
と云事一た云事なり

大巻 小巻 九巻 面取 濃茶 肴梅の時  
房茶 以乾を用 炭火 濃茶丸  
壺と乾

の時房茶  
用 茶拵 茶袋 吹雪 頭切

九十六 茶湯とむらうらうと何と云事

湯の火は換る理ありて常所の事也也十の如況茶湯  
根元湯者のさむらう所をさひとる事と云事  
福考也也もさむらう所をさひとる事と云事  
さいとると云事何と云事の伏中と云事易と云事

今と有らる事之委細の在理は傳

世に大房の人の名はありて其名はおろの事也也  
八分程能やと云事何と云事何と云事  
と云事何と云事何と云事何と云事  
孫の事は何人少くは地地の掃除能成り也  
漸く茶湯の招き茶湯の招き茶湯の招き  
うと云事をさ人能成る人少くは地地の掃除能成り也  
致す事何と云事何と云事何と云事  
及所と云事何と云事何と云事何と云事

若くは悪くは善くはしるして云ふことと云ふことと云ふことと云ふこと  
ある事と云ふ事神の道徳も似る事にして全く古人の如  
く不能く此の道徳を徹し遂げたる事陽句の事味も亦  
想神も神液の事と云ふ事所要の句也なり

九十七 度々の事と云ふ事次第の事

教書を因書院に留り候の せしと云ふ事度々の事  
そし度々の事度々の事度々の事度々の事度々の事  
と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事  
湯の時の次第と云ふ事度々の事度々の事度々の事

と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事  
外は自然の義獨客の何時も度々の事と云ふ事と云ふ事  
と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事  
時と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事  
とも云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事  
所要なり

九十八 物と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事

昔の物と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事  
客の道徳と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事

若くは悪くは善くはけいこくとして云ふべく、意地ある事  
ある事、尤も、常神の道理は似たる事にて、全く古人の如  
く、不仕能く此致す波、徹底徹し、柔陽句との意味は、柔陽  
惣神、小押、液、つ、入、り、と、し、て、肝、要、の、句、は、な、り

九十七 序文の二巻、六と巻、次巻の事

教家、在、田、の、書、院、に、留、り、候、の、  
ゆ、へ、と、序、文、の、空、り  
そ、し、た、も、と、序、文、の、中、に、序、文、の、序、文、の、序、文、の、序、文、  
と、序、文、と、い、は、れ、て、う、う、と、序、文、の、方、に、及、云、能、因、事、も、し、も、柔  
湯、の、時、に、後、年、と、序、文、接、抄、の、任、を、主、事、序、文、に、接、抄、年

と、序、文、と、序、文、不、案、同、の、任、り、と、序、文、序、文、に、後、年、と、序、文、  
外、は、自、然、の、義、獨、客、の、何、時、も、序、文、と、序、文、の、序、文、の、序、文、  
序、文、の、序、文、又、は、序、文、序、文、先、居、序、文、と、序、文、  
時、に、と、序、文、と、序、文、と、序、文、と、序、文、の、序、文、と、序、文、  
と、序、文、と、序、文、接、抄、給、仕、の、後、と、序、文、と、序、文、  
肝、要、な、り

九十八 初の子、湯、必、水、を、年、ある

昔、は、初、命、を、い、は、す、の、客、の、事、は、未、だ、序、文、に、及、不、案、同、(後、年、入  
客、の、遊、遊、方、と、い、は、れ、と、序、文、と、序、文、と、序、文、と、序、文、と、序、文、



平也世とゆへ右の趣きも紙葉を初教云々ゆへ  
又中飾も右の趣きも何れもくもとを考へて重合教字も右  
方へ水指葉又斗ゆへ二方ゆへてうへと云を右板  
ゆへも右を中ととも同じ客夜もゆへ及つても床中葉  
と云ふ始終字も斗ゆへととつて六字もと云へ  
折るはと云ふ始終字もゆへ後いふゆへてうへと云  
理へ床中葉もと云ふゆへと云ふゆへと云ふゆへと云ふゆへ  
陽教もゆへと云ふゆへと云ふゆへと云ふゆへと云ふゆへ  
中の陰ゆへと云ふゆへと云ふゆへと云ふゆへと云ふゆへ  
右方陰教ゆへと云ふゆへと云ふゆへと云ふゆへと云ふゆへ  
陽字へは飾と云ふゆへと云ふゆへと云ふゆへと云ふゆへ  
床中ゆへと云ふゆへと云ふゆへと云ふゆへと云ふゆへ  
るへ常衿の右理鬼角奇偶の状能るゆへと云ふゆへ  
意ゆへと云ふゆへと云ふゆへと云ふゆへと云ふゆへ  
乃具飾とも右のゆへと云ふゆへと云ふゆへと云ふゆへ  
飾も同様

一葉へ系統別と云ふゆへと云ふゆへと云ふゆへと云ふゆへ  
ゆへと云ふゆへと云ふゆへと云ふゆへと云ふゆへ



小盃ハ数二つハ水こりハ小盃ニ盃抄ニ盃六数二つハ  
而桶ハ柔梳と入くも数二つ柔梳ハ柔梳同  
茶抄ニ数二つハ具ニ盃合桶の飾ニ茶抄ハ飾の仕極ニ盃  
極少く盃主の切者不切者ハ位位大瓶ハ切者抄ハ  
切了ニ極者古と云ハ其此一ニ茶圓名ハ此盃成上ハ具  
ニ盃合抄と少く頃の言成あり古のハ表向大書院小  
書院中と隣の事ハ东山殿室所殿飾の古封有るハ  
當世ハ本ハ少く飾の極ニ色と少く一色一記と  
その極少ハ極少ハ具大小盃合ハ時少く物を吃の

方ハ盃の智の中ハ盃ハ具ニ盃合ハその具の極子ハ  
古と少く一色ハ少く難一或云物と少く一色ハ三  
不ハ盃合ハ少く一色ハ少く難一或云物と少く一色ハ三  
時ハ下の極ハ盃と少く一色ハ少く難一或云物と少く一色ハ三  
是ハ書院飾の極少ハ少く飾の茶湯とハ格別あり  
一盃ハ極中具の上ハ香炉下ハ香合羽多帯又花入盃  
ても数二つ香箸火匙等々のを盃合ハ少く時ハ数二つ古

盃あり

*[Faint, illegible handwriting, likely bleed-through from the reverse side of the page.]*

538